

「水の作文大賞」

熊本地震で感じた水の大切さ

熊本信愛女学院中学校 一年 中村 優希

「おはよう。」

そうやって私は洗面所に向かう。そして、顔を洗う。パシャパシャと。冷たい水が、私の顔を洗い流し、一気に目が覚める。

これが、私の一日のはじまりだ。当たり前のように蛇口をひねれば、すきなだけ水がでてくる。私は、これが普通だと思っていた。

しかし、蛇口をひねれば新鮮できれいな水がでてくることは当たり前ではなかった。そう感じたのは昨年四月におきた熊本地震だ。二度の大きな地震で、ライフラインが止まり、水を探しに何軒もの店を家族で周った。

風呂、トイレ、食事などどれも水がなければできない。私は、日常生活でこんなにもたくさんのお水を使っていたことに、驚いた。

また、近くの公園には全国から給水車が来ていた。私は、給水車が来るとテレビで知った時とても嬉しかった。しかし、水をもらう為に列ができていて、何リットルまでと決まっている。

「こんだけで足りるのかなあ。」

他の人がくんでいた水の量を見て私は思った。だからといって、たくさんのお水を私たち家族が使うわけにもいかない。何リットルと決まっている中で必要な量だけ使わないといけないと思った。

そして、私達と同じような困っている一人でも多くの人に水がいきわたるといいなと思った。

そして、私はある何気ない言葉で勇気づけられ心が温かくなったのを今でも覚えてる。

それは、

「頑張ってね。」

というたった六文字の言葉だった。

私は、大切な水とともに温かい人の言葉に涙があふれた。

しばらくして、祖父の家に避難した。蛇口から出る水は、赤茶色にごって飲んで飲水にはできないが、生活用水には使っても大丈夫とのことであった。私は、赤茶色のごっている水を見て本当に熊本の水なのかと疑ってしまった。また、地震の前の地下水百パーセントのすき通る美味しい水がまた蛇口から出てくるのかと、とても不安に感じた。

私が、とても違和感に感じたものはお風呂だ。浴槽内の水が、赤茶色にごって正直あまり入りたくなかった。しかし、入ってみるとやはり気持ち良く、色のことも先に湯船につかれることに感謝した。その頃のニュースや新聞を見ても断水や飲用水の確保などやはり水のことについて取り上げられていた。同じ熊本県でもまだ水が出ない地域の映像をニュースで見ると、水が出ているだけで感謝しないといけないなと思った。

私は、熊本地震で初めての経験をたくさんして、熊本地震でたくさんのお水を学んだ。

当たり前のことが、当たり前であることの喜びを地震を通して学ぶ、その中でも「水の大切さ」について気付かせてもらった。

普段、当たり前のように洗顔や食品洗いで出しっぱなしにしている水。しかし、私は地震を通して「水」に対する考え方が変わった。洗顔や食器洗いなどで水を使用する時は、必ず必要な時だけ水を出す。必要な時以外は、蛇口をひねって水を必要以上に出さない。お風呂の残り湯を再利用する。つまり節水を心がけるといふことだ。難しいことではない。私にでも出来ることだ。

私が大人になり、子供達に伝えていかなければならないことがある。それは、当たり前前の生活ほど幸せなことではない、ということだ。すきな時に、蛇口をひねれば水がでてくる。これは、感謝していかなければならない。

そして、私たちが熊本の美味しい水を後世に残していくには、川を汚さない、水を大切に使用していくことを意識して取り組む必要があるのではないだろうか。